

ボランティアリズムと社会福祉の相克

——米国中西部小都市における高齢化社会対応策の事例から——

The Conflict between “Voluntarism” and “Social Service” in Aging

——Culture and Politics in an American Small City——

藤 田 真理子

1. 問題の所在

近代医療の発達にともない寿命が延び、日本、アメリカ、西欧諸国といった高度産業化社会では人口の急速な高齢化が進んでいる。こうした高齢化した個人の増化に、社会がどのように対応していくのかということが大きな課題となっている。このような社会的変化は、文化人類学に一つの興味ある問題を提供する。その問題とは、背後にある文化体系が個人の老後への適応の仕方、そして、社会全体の対応の仕方によどのように影響を与えるのかということである。本論は、筆者が米国の中西部ウィスコンシン州の小都市リヴァーフロント市で行った調査を中心として、アメリカの高齢化社会への対応の仕方と文化体系の関係を考察する¹⁾。アメリカの文化・社会構造をより良く理解するために、筆者が東京近郊の山田市で行った高齢者を中心とした調査で得た資料と比較しながら検討したい²⁾。

アメリカ文化の中には伝統的な考え方が2つある。一つは、ボランティアリズム (voluntarism) であり、もう一つは社会福祉 (social service) である。両者は、共に、人のために尽くすことを中心とする。しかし、前者は自分の自由意志に基づき、自発的に人の役に立とうとする。ボランティアリズムの根本は、自己救済 (self help) を前提とする。すなわち、自分のことは自分で行った上で、余裕のあるものは他人を助ける。アメリカ社会では、ロータリー、ライオンズ、キワニスといったボランタリー・アソシエーションが発達しており、アメリカ社会の特徴の一つに上げられている (綾部 1988; 鈴木 1985)³⁾。自発的に人のために役立つとうすることは幼児の頃から奨励されている (Fujita & Sano 1986)。一方、後者、社会福祉の考え方は、政府や地域社会が中心となって社会的に恵まれない人々を救済すべきであるというものである。これは、税金は、社会の不平等を是正するためにこそ使われるべきであるという考え方に基づいている。これらの考え方をまとめると、弱

者を救済するということに対して、2つの考え方がある。一つは、個人個人の自発的な好意に任せる。もう一つは、国家が弱者の救済の責任を持つというものである。

アメリカ社会では、この2つの考え方がしばしば対立する概念としてとらえられている。例えば、共和党（Republicans）は、前者の考え方を支持する。政府の福祉事業の規模や関連の役所はできるだけ小規模にとどめ、弱者の救済は個人個人の自発的善意に任せようとする。一方、民主党（Democrats）は政府による社会福祉の拡大を主張する。一般の人々の考え方の中にも、ボランティアと社会福祉の考え方の対立がみられる。前者を主張する人は、社会福祉は、welfare（福祉という意味だが、「ほどこし」、「おめぐみ」といったニュアンスが強い）と、とる人が多い（Fujita 1984）。

アメリカの高齢者のための福祉制度は、1965年に制定された老人福祉法（Older Americans Act）によって整備された。この福祉法に基づき、1970年代には全米の地域社会レベルにおいて老人向けの施設やプログラムが設立された。⁴⁾1970年代後半に政権をとった民主党のカーター大統領は高齢者向け福祉制度や設備の拡大を行ったのである。筆者の調査地、リヴァーフロント市の老人センター、ジェファーソン・センターも1979年に設立された。ここでは、昼食プログラムを中心に種々の高齢者向けのプログラムが用意されている。しかし、その後には政権をとった共和党のレーガン大統領は政府の出費の節減を唱え、それまでに設置されたプログラムに対する財政的援助も削減された。助成金の削減は、プログラムの運営に危機感をもたらし、担当の職員は、財源の減少の中でプログラムの質を維持するための対応に追われるようになった。

社会福祉制度の拡大は高齢者のみならず、地域社会全体に影響をおよぼす。例えば、高齢者向けの設備、プログラムを企画、管理、運営するために州、郡、市の各レベルで老人福祉事業部といった役所が設置され、若い人々の雇用機会が増加する。地域社会レベルでは、特に子育てを終えた中年の女性の雇用機会を拡大した。そして、助成金の削減は彼らに解雇という不安感をもたらす。

高齢化社会に対応するために政府が果たす役割は大きいだが、限界がある。昼食プログラムも、政府からの助成金だけではなく利用者の「寄付金」に頼っている。また、地域レベルでの高齢者向けのプログラムを支えているのはボランティアである。アメリカの高齢者向けのプログラムに携わるボランティアは、奉仕活動の担い手が圧倒的に若い人である日本の状況と違い、高齢者自身である。特に、現在70歳代のアメリカ人高齢者は1930年代の大恐慌を経験し、「ほどこし」をきらい、独立心、自助の精神が旺盛だといわれている。彼らの多くは、老人センターでのボランティア活動を自分の「仕事」とみなし、老後の生きがいとしている（藤田 1988）。彼らは、ボランティアとして働くことは、自らの独立・自立を象徴し、このことが自分は他の高齢者よりも優れているという自負心をもたらす。

しかし、高齢者向けの施設やプログラムを運営していくには、ボランティアのみに頼る

ことには自ずから限界がある。また、公的な財政援助を受け、全ての高齢者のための施設、プログラムであるためには、運営が公平かつ平等でなければならない。管理・運営上の規定も必要となってくる。ボランティアの統括も職員の重要な課題の一つとなる。

このように、高齢者向けの施設やプログラムにはボランティアと社会福祉の両方の考え方が反映され、両者とも不可欠である。これらの運営には、両者のバランスをとることが必要である。しかし、昨今のアメリカ政府の福祉政策の縮小、助成金の削減は高齢者向けのプログラムの運営に困難性をもたらし、両者のバランスをおびやかしている。本論では、老人福祉事業部の助成金削減に対する対応策がもたらした高齢者ボランティアと職員との間の衝突を中心に、高齢化社会が内蔵する問題点と価値観の関係を考察したい。

II. アメリカの老人センターの活動：日本と比較して

本論の調査地であるリヴァーフロント市は、米国の中西部ウィスコンシン州のほぼ中央に位置するバイン郡の役所の所在地であり、人口約2万2千人の⁵⁾小都市である。この市は、もともと材木収集および製材の町として1850年頃に発達した。人口からみると小規模だが、当市の市民は種々のエスニック・グループによって構成されている。初期の住民は開拓者として東部から移住した通常ヤンキーと称されるアングロ・サクソン系の人々であった。19世紀半ばにドイツ系、アイルランド系やスカンディナヴィア系、そして、19世紀の後半にはポーランド系の移住者が移り住み、この町を発展させた。リヴァーフロント市は、1950年代までは家具製造業と製紙業を中心とした工業都市、および、酪農とじゃが芋を主産物とする農業地域として知られていた。1960年頃から、商業と師範学校を前身とする州立大学がこの市の重要な雇用の場として既存の産業に加わった。高齢者や幼児を対象としたコミュニティの施設やプログラムもこの時期に増加した。

バイン郡全域の高齢者向けサービスの管理・運営をおこなうのは、郡役所の老人福祉事業部 (Commission on Aging) である。この事業部は、リヴァーフロント市ジェファーソン老人センターの中に設置されている。部長 (40歳後半の女性) と他9人の専任職員がいる。老人福祉事業部の主な仕事は、高齢者向けの施設、プログラムや催し物を企画、運営、管理すること、および、高齢者に必要な情報を提供したりすることである。福祉事業部の行う事業のうち最も重要なものの一つに、高齢者向けの昼食プログラムの運営がある。バイン郡には、昼食を提供する場所 (ミール・サイト) が、ジェファーソン・センターを含めて6ヵ所ある。この昼食プログラムは、郡全体のプログラムを管理する専任職員 (50歳代の女性) と各ミール・サイトの管理責任者 (40~50歳代のパート・タイムの女性) で構成される。実際の運営には、高齢者のボランティアの協力が果す役割が大きい。

東京近郊の山田市の老人サービスとの対照を通して、米国の高齢者向けサービスの特徴

を明らかにすることにする。山田市（人口約12万人）は、日本の他の地域と比較すると一早く高齢者向けの地域サービスを実施したところとして知られている。「地域サービス」という名称はこの市で1974年から用いられている。「地域サービス」の中心となる概念は、地域の中にある高齢者向けの施設や活動グループとの間に密接な連絡網を維持し、得られた情報を老人に提供するだけでなく、新しい活動グループに参考情報を提供しうる母体（事務局）をもつシステムのことである。この母体を担っているのは山田市社会福祉協議会の中に設けられている老人保健福祉事業事務局である。山田市には、リヴァーフロント市のジェファーンソン・センターに類似した高齢者向け施設として市立老人憩いの家が2ヵ所ある。田辺憩いの家は市の南部にあり新興住宅地に近接していて、利用者は市内に居住する年数が比較的短い人が多い。もう一つ、中野憩いの家は市の北部、農業生産地に近接し、利用者は地元で長く居住する人が多い。本論では、ジェファーンソン・センターの活動を後者の中野憩いの家の活動と比較する。

リヴァーフロント市のジェファーンソン・センターは、多目的機能を持った広大な施設である。入口を入ると受付があり、担当の職員が利用者の質問に対して情報を提供したり、電話での対応にあたっている。玄関は、ロビーに続いていて、4人がけのテーブルが数個とソファが置いてある。一角には、紅茶、コーヒーにドーナツ等の菓子がセルフ・サービスで利用できるようになっていて、ロビーに隣接している小さな部屋には玉突用の設備がある。利用者は、大抵男性である。このセンターの中で一番大きな部屋は食堂である。この食堂は約150人収容できる規模を持つ。食堂の奥は台所になっている。センターにはこの他、陶芸、パッチワーク等の工芸作成のための部屋、高齢者が作った作品を販売するギフト・ショップ、会議室、心身に障害をもつ高齢者のための老人デイ・ケア・センターと老人福祉事業事務局の職員のための部屋が数ヵ所ある。

山田市の中野憩いの家は、寺の境内に隣接する閑静な場所にある。玄関脇には事務室があり、初めて利用する高齢者は緊急連絡先を登録する、職員が利用者に参加証をくばる。事務室は、この他、菓子などを売る小さな売店の役割もしている。事務室の奥は職員の休憩室と給湯室になっている。中野憩いの家には、常勤の職員が2人（40歳後半の女性）いる。職員はこの他に高齢者送迎用の巡回バスの運転手（50歳後半の男性）がいる。日本の老人センターの重要な設備の一つとして風呂があるが、中野憩いの家にも、男女別々の浴室が玄関脇にある。庭に面している廊下を通るとステージ付きの大広間があり、二列に長く座机が並べてある。大広間の横にテレビのある小さな和室がある。離れに囲碁・将棋をする場所があり、この離れの利用者は男性ばかりである。

このように、双方の老人センターは設備の面では共通している面が多い。しかし、活動面では、全体の傾向として米国の老人センターは食事プログラムが中心であるのに対し、日本の老人憩いの家では、大広間のステージでカラオケに合わせて歌ったり、踊ったりす

ることが中心となる。

ジェファーソン・センターでも、活動の中心をなすのは昼食プログラムである。昼食は月曜日から金曜日まで毎日提供される。Older Americans Act（老人福祉法）という連邦政府の規定は、一定の食事代というものは定めてはいけないとしている。これは、収入の如何によって高齢者の食べる権利を剥奪してはいけないという配慮に基づくものである。利用者は代わりに donation（寄付金）を払う。しかし、寄付金を強制することは規定上できない。利用者は、センターの受付の所で予約名簿で自分の名前をチェックするときに、受付の係の人から小さな封筒を貰う。各自、封筒の中に任意の金額を入れ、食堂の入口の所に置いてある箱に入れる。この箱はホステスと称する食堂の案内係の立っているところの脇に置いてあるので目立たない。このように、老人福祉法の規定は、原則として、利用者が入れたのか入れなかったのか、また、いくら入れたのか他の人には分からないように食事プログラムを運営するように指示している。センターの管理者の話によると、利用者は大体1人1ドルぐらい小さな封筒にいれているとのことである。

一方、中野老人憩いの家では、制度化された食事プログラムというものは存在しない。人々の活動の中心となるものは、テーブルの所でおしゃべりをする事で、好きな人はステージが上がって歌ったり、踊ったりする。しかし、「食べること」は利用者がこの施設で過ごす時間の大半を占め、重要な役割を果たしている。利用者は朝10時頃に憩いの家につくと、まず、売店で菓子類を買い求める。大広間の座机につくと、テーブルの上にそれらの菓子類を並べ、周りの人3-4人で分け合う。お茶は憩いの家の職員が用意してテーブルの上に置いておく。利用者の多くは、自宅から弁当やおにぎり、またはコロケ、天ぷら、煮物といったおかずを持ってきて周囲に座った人同士わけあう。人によっては、そば、うどん、どんぶりもの等の出前を近くの店に注文する。利用者は、憩いの家で約5時間過ごすが、その間休みなく食べ続ける。食事をするというよりも、利用者同士おしゃべりをする時のお茶受けとして食べるという具合である。従って、食物は人々の社交を円滑にしているものと考えられる。

ジェファーソン・センターを利用するアメリカ人高齢者の多くは、憩いの家に来る日本人高齢者と違い、昼食を取ることを目的に来る。センターの昼食も余興やおしゃべりの補足的なものではなく、食事そのものが中心的存在である。これは、昼食プログラムが、高齢者の自立を促進するために設けられたことを見ても明かである。アメリカ人の考え方では、人は幾つになっても独立・自立していることが前提とされている。日本では、老後は家族と住むことが理想とされ、地域の「一人暮らしの老人」は特別のニーズを持つ人々として、老人地域サービスの要注意リストの対象となるが、アメリカでは家族が近くにいても一人暮らしをする高齢者は数多くみられ、むしろ、一人で暮らすことは独立を維持していることの象徴として高く評価される。高齢者の独立・自立に欠かせないのがバランスのとれ

た食事をきちんと取るということである。従って、アメリカの高齢者向けの福祉プログラムの中心は、食事を恒常的に低価で供給するということになる。

利用者が勝手に好きなものを好きな時間に食べる憩いの家と違い、ジェファーソン・センターの食事は定められた一定の時間内にしか供されない。利用者も自宅から食物を持って来ることもない。1日分の昼食は、鳥、豚、牛肉などの肉類を中心としたおかずに、サラダと、じゃが芋、人参、豆類などの野菜、パンとバター、牛乳に加えてケーキなどのデザートがつく。その日の昼食の献立は予め定められている。1週間分のメニューが前週の木曜日毎に地元新聞に発表される。利用者はそのメニューを見て参加する日を電話で予約することになっている。このセンターでは、食事自体は作っていない。地域の教育委員会と契約を結び、学校給食を利用している。時には、ホットドックのように高齢者向けではないと考えられる献立が学校給食の中に入っていることがある。そのために、食事内容は予めセンター側の昼食プログラム責任者が献立予定表を検討し、必要があれば学校側に変更を申し入れる。糖尿病、高血圧等の病気を煩っている利用者のためには、減塩、減糖の特別の献立が用意される。

ここで、ボランティアの年齢層と役割を日本の場合と比較しながら考えてみる。食事プログラムを担当しているのは、前述のように郡全体の食事プログラムを管理する専任職員と各ミール・サイトの責任者だが、昼食プログラムの実際の運営はボランティアの協力なしにはできない。日本の場合、高齢者のためのボランティアには、高齢者自身よりも中年の主婦や大学生などの若い人になる場合が多い。

山田市の老人サービスの一つにも、「おしゃべりの会」という中年の主婦（30、40歳代）のボランティア・グループが、月に1度高齢者のために食事の会を開いている。ボランティアの数は10人ぐらいである。この主婦のボランティアが、その月の献立を決め、材料を買い、調理、配膳、後かたづけの一切を担う。高齢者の参加者は平均して30人位で、彼らは150円の実費を払うだけである。すなわち、ボランティアは「若い人達」で、高齢者をもてなす。高齢者は、「お客」の役割を担うわけである。

ところが、ジェファーソン・センターのボランティアはすべて60歳以上の高齢者である。1日につき4－6人のボランティアがいる。女性のボランティアが多いが男性も数人いる。ボランティアは毎日働くのではなく、特定の個人は週に3日以上は働いてはいけないことになっている。これは担当者の方針としてできるだけ多くの人にボランティアとなる機会を提供したいことによる。この方針には、ボランティアとしての働き口を一人の人に独占させないという意味を含んでいる。週に1回とか2回しか働かない人もいるので、ボランティアの数は延べ25人前後である。ボランティアの仕事の内容は、台所で配膳の準備、配膳、そして洗いものをすることに加えて、ホステスとして利用者に対する案内役および新しい参加者を食堂の入口で歓迎する役がある。

参加者も、「おしゃべりの会」に集まる日本人高齢者と違って全面的に「お客」の役割を期待されているのではなく、ある程度のことは自分でやらなければならない。食事はカフェテリア形式で、ボランティアのホステスがテーブルの上に置かれた札の番号を読み上げる。呼ばれた番号のテーブルの人からカウンターに四角いお盆のような容器に配膳された食事を取りに行く。また、食事が終了すると各自このお盆を洗い場に持って行く。例外は、足腰に障害のある人々で、カウンターまで歩いて行くのが困難な人のためにはボランティアが食事をテーブルの所まで運んでくれる。

このように、「おしゃべりの会」の主旨が、若い人々がお年寄りをできるだけもてなそうということに対して、ジェファソン・センターの食事は高齢者の自立を促進することを助けるものだということがいえる。このことは、高齢者が食事中に「お客」扱いされないということに加えて、食事を予約したり、特別食を申し込むことが利用者本人の責任とされている点からも伺える。

これまで、老人センターを中心としたアメリカ人と日本人の高齢者の活動と行動様式を比較してきたが、ここでこのような形式の活動が老人センター以外のアメリカと日本社会ではそれぞれどのような機会にみられるのかを検討してみたい。まず日本の老人憩いの家の活動、特にステージで踊ったりカラオケに興じる高齢者の姿は、温泉宿の宴会を思わせる。これは、老人憩いの家には必ず風呂が付いているということからも、温泉に入ってリラックスをして、無礼講に遊びを楽しむという伝統をモデルにしているといえる。そのような場面では、仕事や日常生活を離れて羽目を外すということが期待されている。「おしゃべりの会」の活動は、高齢者に対するもう一つの文化的モデル、すなわち、親孝行である。食事を作り、もてなすボランティアの姿は、娘が親、あるいは、嫁が姑に仕えるといった様相を持っている。

一方、ジェファソン・センターで行われている食事形式、いわゆるカフェテリア・スタイルは学校給食に取り入れられている。また、ロータリー・クラブ、ライオンズ・クラブといった慈善事業団体の会合や、教会の資金集めのための催しを企画したりするための会合で食事が出される場合、同様のカフェテリア形式が取られる。老人センターの活動が慈善事業団体や教会の活動と類似しているのは、活動の実際の運営がボランティアの働きによって行われるという点にも見られる。アメリカ人は一般的に中学生、高校生の頃から地域のボランティア活動に積極的に参加するし、またそうすることを奨励される。従って、ジェファソン・センターの高齢者ボランティアも彼らのこれまでの人生の中で、多様なボランティア経験が豊富にあるといえる。日本の老人センターが遊興・もてなしということモデルにしているのに対し、アメリカ人高齢者は老人センターでの活動を地域のボランティア活動をモデルとしてとらえているといえる。

III. 財政難とボランティアのディレンマ

アメリカの老人センターを中心とした高齢者向けのプログラムは、地域のボランティア活動の側面を持つ一方で、政府からの助成金による福祉政策の一環でもある。従って、高齢者向けの企画は、両者のバランスが取れて初めて効率的に運営されるものである。ところが、レーガン政権の社会福祉の縮小、助成金の削減はジェファーソン・センターの食事プログラム運営にも危機感をもたらした。老人福祉事業部の職員は助成金の削減に対応する戦術を種々考えた。一つは、助成金の削減に対応するためには、食事プログラムの開設日を減らして必要経費を抑えることである。そして、パイン郡内にある小さな町のミール・サイトの一つでは開催日が週3日から2日に減らされた。職員を解雇して人件費を減らす方法も考えられたが、これは老人サービスの質の低下につながるので却下された。

一番有効な方法として考えられたのが収入を増やすこと、すなわち利用者負担分を増加させる方法である。しかし、この方法は一見容易に見えるが、実行するのは困難なものである。なぜならば、老人福祉法の規定で、高齢者向けの食事プログラムは食事代を強制してはいけないことになっているからである。この規定を文字通り解釈すれば、利用者は寄付金を全く払わなくても食事はできるわけである。任意の寄付金の増額を要請することは容易なことではないのがわかる。

そこで福祉事業部はキャンペーンを行うことにした。まず、ジェファーソン・センターでは、ミール・サイトの責任者が行事などの案内をする食事の前のアナウンスメントの時間を利用して、食事プログラムに助成金削減がどのように影響しているか、また、一人一人が25セント余分に寄付をしてくれればプログラム全体でどのくらい助かるかなどを説明した。掲示板には1ヵ月の寄付金を日別のグラフにして張り出した。この責任者によると、寄付金の値上げの要請は利用者比較的好意的に受け入れられ、額は徐々に延びていったという。

収益金を延ばすために、福祉事業部はこれまで除外していた食事プログラムのボランティアにも封筒を渡し、寄付金を払うことを促すことにした。ところが、このことが実行されるとボランティアたちは猛烈に反発をした。ある人は、渡された封筒の上に、「私はボランティアだ。寄付金を払うことを拒否する」と書いて、その封筒を空のまま寄付金箱にいれた。何人かのボランティアは、約束の日に手伝いに来るのをやめた。今まで、表向きには言われてこなかった、食事プログラムの実際の運営はボランティアが行っているということが公然と言われるようになった。センターの中の雰囲気は緊張し、ボランティアは不満の声をつのらせた。不穏な空気は約2週間続いた。その間、キッチンの人手不足は職員が交代で補った。結局、福祉事業部の方が妥協し、ボランティアには寄付金を要請しないということで話し合いがついた。ボランティアの方も以前のように仕事を始めた。

では、なぜボランティアに寄付金を要請したことがこのような大問題に発展したのであるろうか。ボランティアが寄付金を経済的に負担に感じたためとは考えにくい。前にも述べたように、センターでの食事はフル・コースでたとえ1ドル25セント払ったとしても他の町のレストランで払うよりかなりの低額である。ボランティアも働かない日には他の人と同様、寄付金を払い、また、このことに対しては不満を持たない。ボランティアが怒った理由は、彼らの労働に対する見方が職員と彼ら自身で食い違っていたためであると考えられる。この事件から明らかになったのは、職員側はボランティアの仕事は代償が皆無の無償奉仕である、あるいは、あるべきだと見ているということである。このことは、ボランティアにとっては、彼らの労働が正当に評価して貰っていないことを意味する。

ボランティアの仕事に対して金銭的な報酬はないことが前提としてある。このセンターのボランティアも彼らの労働に対して賃金を要求したのではない。しかし、地域社会の中でみられるボランティア活動にはなんらかの余録がつくものである。例えば、教会の資金集めのための食事では、調理などの仕事は無償で行うが、食事が余ればボランティアで分けあって、持ち帰るのが一般的である。しかし、同様のことがこのセンターではできない。なぜならば、ジェファーソン・センターは公共の福祉施設として州の規定、特に、衛生基準に従わなければならない。この規定によると、配膳前の食物でも余ったものは廃棄処分しなければならない。ディスプレイに流して捨てられる食物を見ながら、ボランティアの高齢者はよく「もったいない」と嘆くが、彼らとその食物を家に持ち帰ることは許されない。このように、センターでのボランティアの仕事は余録さえも期待できない。

このことに加えて、今回のボランティアに対する寄付金の要請は、この事件以前のボランティアの行動を彼らに再解釈させる契機となった。ボランティアは、利用者の食事が始まる前に自分たちだけで利用者と同じ食事をしてきた。彼らは、その食事は彼らの労働に対する代償として考え、寄付金を払ってこなかった。もし、寄付金を払うことになると、今までの食事は、ほどこしを受けていたということになる。ほどこしを受けることは、社会的落伍者としてみられ、恥しいことである。もしそうなれば、彼らの中に今まで恥しいことをしてきたのではないかと感じる者がいたとしてもおかしくないことになってしまう。さらに、ボランティアと他の利用者との間の溝を深めることにもなった。この事件がおきるまでは、ボランティアが寄付金を払っているのかいないのかは問題にならなかったし、利用者の中には知らない人も多かった。しかし今回の寄付金の要請は、あたかもボランティアは食事代がただになるから働いているのだというイメージを作り上げてしまった。そして、このことを公然という利用者もいた。

このように、プログラムに対する助成金の削減に対する対応策は、ボランティアがプログラム上に果たす役割の大きさを明らかにしたと同時に、彼らの立場の脆さ、彼らと職員、そして彼らと他の高齢者の間の相克を顕在化する結果になった。

IV. 結論：ボランティアリズムと社会福祉の相克

本論では、急速に高齢化する社会に対応するしかたと背後にある文化体系の関係を、アメリカの中西部の小都市における老人センターを一例として検討した。ジェファーソン・センターの事例にみられるように、アメリカ社会の高齢化社会対応策は、一つには運営を支えるために、政府からの助成金をだし、また、その助成金を使ってプログラムを企画、管理する職員を配置した地域社会の社会福祉システムを整えることであった。この点では、「老人サービス」という名称で地域社会レベルで福祉活動を充実させようとしている東京の山田市を初めとする日本の多くの自治体とにているが、助成金の額、職員の数では日本よりもかなり進んでいる。もう一つの対応策は、アメリカ文化の伝統であるボランティアリズムを駆使すること、特に、高齢者を中心としたボランティア・システムを形成することである。この点は、ボランティアというと主婦を中心とした若い人々で、活動の主旨も高齢者にできるだけつくそうとしている日本の場合とかなり違っている。

ジェファーソン・センターの昼食プログラムは、この社会福祉とボランティアリズムという2つのシステムが運営上不可欠であることを示した。東京山田市の「おしゃべりの会」を運営している主婦ボランティアは、この会が提供する食事が高齢者の楽しみになっていることを十分に承知しながらも、労力を考えると月1回以上の開催は無理だという。高齢者の自立を促進するために食事を低額で提供するとすれば、恒常的に提供し、そのプログラムを管理・運営する専任の職員並びに助成金が必要となる。しかし、これまで見たように、ジェファーソン・センターの昼食プログラムの実際の運営は職員だけで行えるものではなく、ボランティアが大事な役割を果たしている。このことはまた、高齢者にもボランティアとして活動する機会、つまり仕事をする機会を提供しているといえる。この点に関しては、「若い人々が私達のために一生懸命やって下さるが、とつても気を使う。私達で互いに助け合うことが出来たらどんなに気楽かとよく思う」といった「おしゃべりの会」に参加する日本人高齢者の言葉が印象的だった。

しかし、同時に、ジェファーソン・センターでのボランティアを中心とした事件は、この2つのシステムが互いに競合する可能性を持っていることも示した。この事件で明らかになったのは、単に政府からの助成金が高齢者向けプログラムに不可欠であるということだけではない。この事件の本質は、それまで潜在していた若い職員と定年退職した高齢者の力関係の不平等さを浮き彫りにしたことにある。すなわち、このセンターのプログラムを運営する仕事をして収入につながる人とそうではない人の違いを明確にしたのである。社会福祉システムの拡大は雇用機会の拡大につながり、逆に、助成金の削減は若い職員にとっては自分の失職につながる。職員にとって、昼食プログラムやその他のサービスを存続させることは、高齢者のためになるばかりでなく、自分達の職の安定にもつながる。若

い職員の立場からみるといわば当然のことであるボランティア達に対する寄付金の要請は、ボランティアにとっては全く別な意味を持った。

高齢者のボランティアは、彼らの努力と活動に対して、若い人々になれば当然支払われるべき金銭的報酬が与えられていないことを熟知している。また、金銭的報酬の額が仕事の、ひいては人間の価値まで決めるアメリカ社会において、彼らの無償奉仕活動は、言葉で感謝されることはあっても、実際には重要視されていないことも知っている。にもかかわらず、ボランティア活動は彼らに生活のリズムを提供し、彼らの生きがいになっていた。しかし、寄付金要請の事件は、彼らの無償奉仕活動の意義を根底から覆したことになる。仕事内容が類似しているだけに、若い職員達との違いは高齢者にとって痛切であったと思われる。

ジェファーソン・センターの抱える問題点は、我々日本人がこれからの高齢化社会に対応するときに示唆を与えてくれる。すなわち、老人福祉の充実は、単に経済的側面ばかりではなく、高齢者が生きがいを見いだせるものでなければならない。そのためには、生きがいの源泉となっている文化的体系を十分に理解し、生かせるものでなくてはならないということである。

〔謝辞〕

本研究は米国教育アカデミー・スペンサー・フェローシップと、アサヒ生活文化研究振興財団から研究助成金を受けました。調査に御協力下さったリヴァーフロント市と山田市の高齢者の方々および老人関係諸機関の方々、本論にコメントを下さった佐野敏行氏に対して深く感謝いたします。

注

- 1) リバーフロント市における調査は1984年10月から1987年3月にかけて行われた。この調査はエスニティー、職業集団の変化を中心としたコミュニティー・スタディーで、老人センターの調査はその一環として行われた。リバーフロント市の調査については、Fujita & Sano (1986)、藤田 (1989) および Sano (1989) を参照のこと。本論では、個人のプライバシーを保護するために、ウィスコンシン州と東京以外の全ての地名および施設の名称には架空のものをを用いている。
- 2) 山田市での調査は筆者が単独で1983年に、佐野敏行と共同で1986年に行った。山田市については、佐野・藤田 (1988) を参照して頂きたい。
- 3) アメリカのボランティアリズムに関する民族誌には以下のようなものがある (Hsu 1963; Lynd & Lynd 1929; 1937; Tocqueville 1964; Warner 1947)。

- 4) アメリカ社会を対象とした民族誌的老年研究には次のようなものがある (Colson 1977; Cuellar 1978; Hochschild 1973; Jacobs 1974; Johnson 1971; Myerhoff 1978; Stephens 1976; Vesperi 1985)。
- 5) アメリカの行政区分は、まず州に分かれ、各州は郡に分かれる。郡はさらに市、町 (township) に分かれる。

引用文献

- 綾部恒雄 1988 『クラブの人類学』京都：アカデミア出版会。
- Colson, Elizabeth 1977 *The Least Common Denominator*. In *Secular Ritual*. B.Myerhoff and S.Moore (eds.), pp.189-198. Assen: Van Gorcum.
- Cuellar, Jose 1978 *El Senior Citizens Club: The Older Mexican-American in the Voluntary Association*. In *Life's Career—Aging:Cultural Variations on Growing Old*. B. Myerhoff & A. Simic (eds.), pp.207-230. Beverly Hills: Sage Publications.
- Fujita, Mariko 1984 *The Cultural Dilemmas of Aging in America*. Ph.D. dissertation. Department of Anthropology, Stanford University.
- Fujita, Mariko & Toshiyuki Sano 1986 *Children in American and Japanese Day-Care Centers: Ethnography and Reflective Cross-Cultural Interviewing*. In *School & Society: Learning Content Through Culture*. Henry T.Trueba & Concha Delgado-Gaitan (eds.), pp.73-97. New York: Praeger.
- 藤田真理子 1988 「象徴の連続性と生活秩序の再定義：米国カリフォルニア州白人の定年退職者の事例から」『民族学研究』53：58—85。
- 1989 「食事と文化化：米国中西部における象徴体係とライフステージ」『相愛大学研究論集』5：115—127。
- Hochschild, Arlie Russell 1973 *The Unexpected Community; Portrait of an Old Age Subculture*. Berkely: University of California Press.
- Hsu, F.L.K. 1963 *Clan, Caste, and Club: A Comparative Study of Chinese, Hindu and American Ways of Life*. Van Nostrand Co. & Inc.
- Jacobs, Jerry 1974 *Fun City: An Ethnographic Study of a Retirement Community*. New York: Holt, Reinhart & Winston.
- Johnson, Sheila K. 1971 *Idle Haven: Community Building among the Working-class Retired*. Berkeley: University of California Press.
- Lynd, R.S. and Lynd, H.M. 1929 *Middletown*. Harcourt, Brace & Co.
- 1937 *Middletown in Transition*. Harcourt, Brace & Co.
- Myerhoff, Barbara 1978 *Number Our Days*. New York: Simon and Schuster.
- Sono, Toshiyuki 1989 *Caring Americans: An Ethnography of Riverfront, A Middle-sized Town in Midwest*. Ph. D. dissertation. Department of Anthropology, Stanford University.
- 佐野敏行, 藤田真理子 1988 「老人の場と役割：コミュニティーのコンテクストにおける民族誌的分析」『民族学研究』53：310—320。

藤 田 真理子

- Stephens, Joyce 1976 *Loners, Losers, and Lovers: Elderly Tenants in a Slum Hotel*. Seattle: University of Washington Press.
- 鈴木真理 1985 「遊びと仲間集団」『新編 人間の一生——文化人類学の視点から——』（綾部恒雄編）アカデミア出版会, 133-150頁。
- Tocqueville, A. de, 1964 Democracy in America. In *The Character of Americans*. Michael McGiffert, ed. The Dorsey Press.
- Vesperi, Maria D. 1985 *City of Green Benches: Growing Old in a New Downtown*. Ithaca: Cornell University Press.
- Warner, W.L. 1947 *Yankee City Series*. Vol. I, II, III, IV, Yale University Press.